

# 人生100年、子に先立たれる女性が増える？

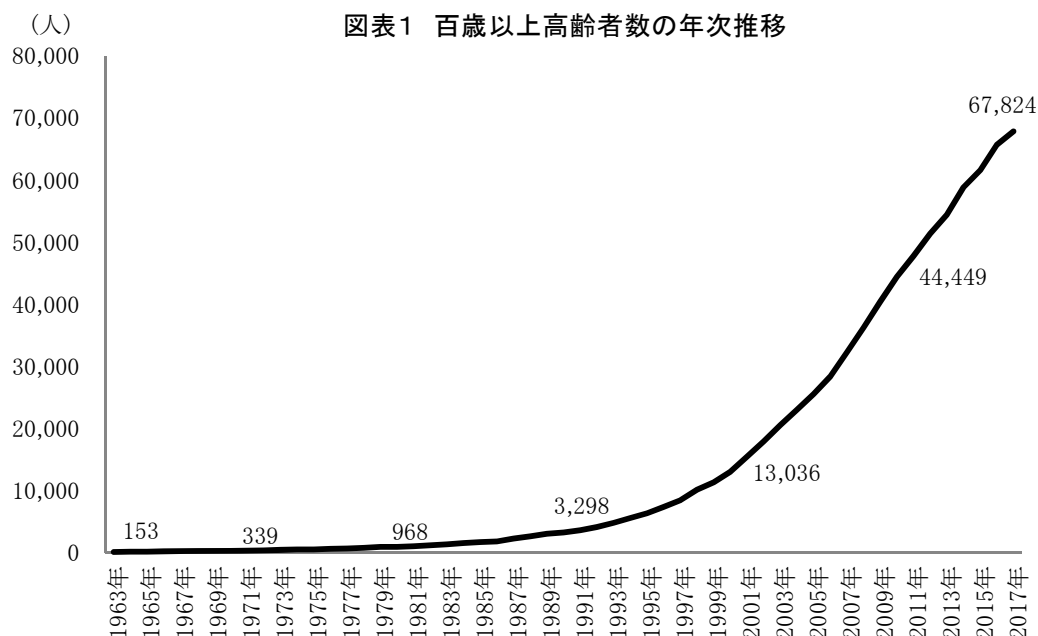
— “センテナリアン”としてのライフデザインを考える必要 —

主席研究員 宮木 由貴子

## <100歳以上まで生きられる社会の到来>

古来、長生きは人類の夢だった。「人生100年時代」とも言われる長寿社会となった日本は、その夢をいち早くかなえた長寿先進国である。しかしその社会は必ずしも「めでたい=寿」こととして受け入れられていない。今日の社会システムの大半は、これほどの長寿社会を前提に考案・設計されてこなかったため、例えば経済的な生活基盤の確保や年金制度、高齢者の就労、健康・介護、人生設計といった面で、様々な方針転換が図られる必要がある。

もちろん、平均寿命そのものが100歳となる時代はまだ到来していない。2016年の日本の平均寿命は、男性で80.98年、女性で87.14年である。しかし、2060年には男性84.19年、女性90.93年になると予測されている。そして、1963年にはわずか153人だった100歳以上の人、いわゆる「センテナリアン (Centenarian)」の数は、2016年9月には6万7,824人となっており、毎年増え続けている（図表1）。



注：数値は左から順に1963年、1970年、1980年、1990年、2000年、2010年、2017年のもの  
資料：厚生労働省「平成29年百歳以上高齢者等について」（2017）より作成

### ＜都道府県別にみたセンテナリアン＞

人口 10 万人当たりの 100 歳以上の高齢者数を都道府県別にみると、上位 5 位までは順に、島根県、鳥取県、高知県、鹿児島県、佐賀県となっている。人口 10 万人当たりの 100 歳以上の数は 100 人近い(図表 2)。一方、下位 5 位については埼玉県、愛知県、千葉県、大阪府、神奈川県となっている。人口 10 万人当たりの 100 歳以上の数は 30～40 人程度で、最上位の島根県と最下位の埼玉県では 3 倍程度の差がある。

全国平均では 53.43 人という人口 10 万人当たりの 100 歳以上の高齢者数は、高齢化の度合いや、若者の流出等、地域ごとの事情によってかなり状況が異なることがうかがえる。

図表2 人口 10 万人当たり百歳以上高齢者数 都道府県別ランキング

	上位	下位
1位	島根県(97.54 人)	埼玉県(32.09 人)
2位	鳥取県(92.11 人)	愛知県(35.01 人)
3位	高知県(91.26 人)	千葉県(37.83 人)
4位	鹿児島県(91.20 人)	大阪府(40.29 人)
5位	佐賀県(85.02 人)	神奈川県(40.86 人)
6位	香川県(83.23 人)	東京都(42.83 人)
7位	山口県(83.21 人)	宮城県(44.21 人)
8位	長野県(81.85 人)	栃木県(44.86 人)
9位	愛媛県(81.16 人)	青森県(45.24 人)
10位	沖縄県(80.75 人)	茨城県(46.71 人)
全国平均	53.43 人	

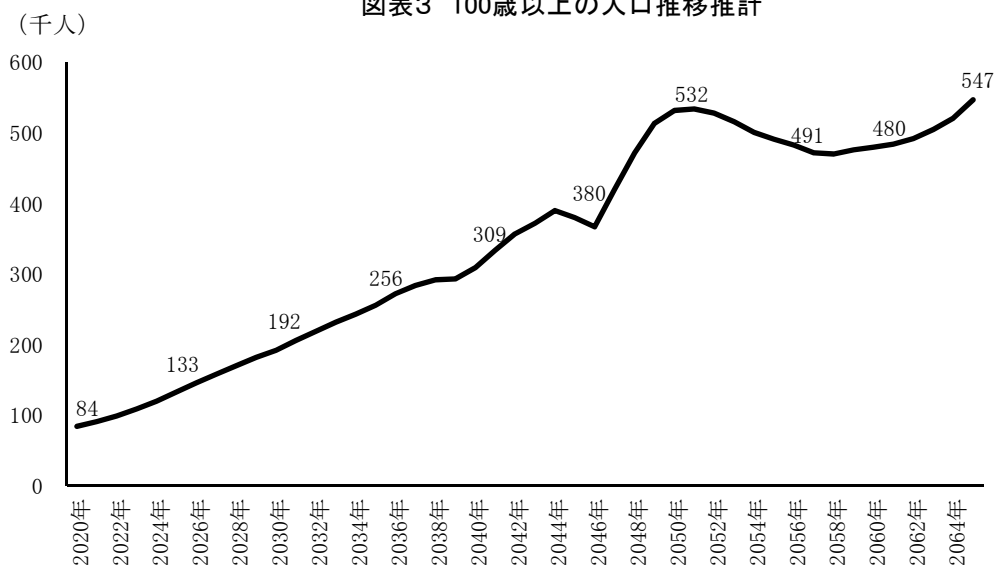
注：カッコ内は人口10万人当たり百歳以上高齢者数  
資料：図表 1 に同じ

### ＜センテナリアンは今後も増加＞

国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計によれば、100 歳以上の人口は 2025 年には 13 万 3,000 人、2035 年には 25 万 6,000 人、2045 年には 38 万人、2055 年には 49 万 1,000 人、2065 年には 54 万 7,000 人になると推計されている(図表 3)。

100 歳まで生存する確率は確実に高まっており、例えば 2000 年に生まれた人が 65 歳になる頃には、日本全体の人口が減少する中、55 万人近いセンテナリアンがいる社会となっていると考えられることから、「人生 100 年」は決して他人事ではないといえよう。

図表3 100歳以上の人口推移推計



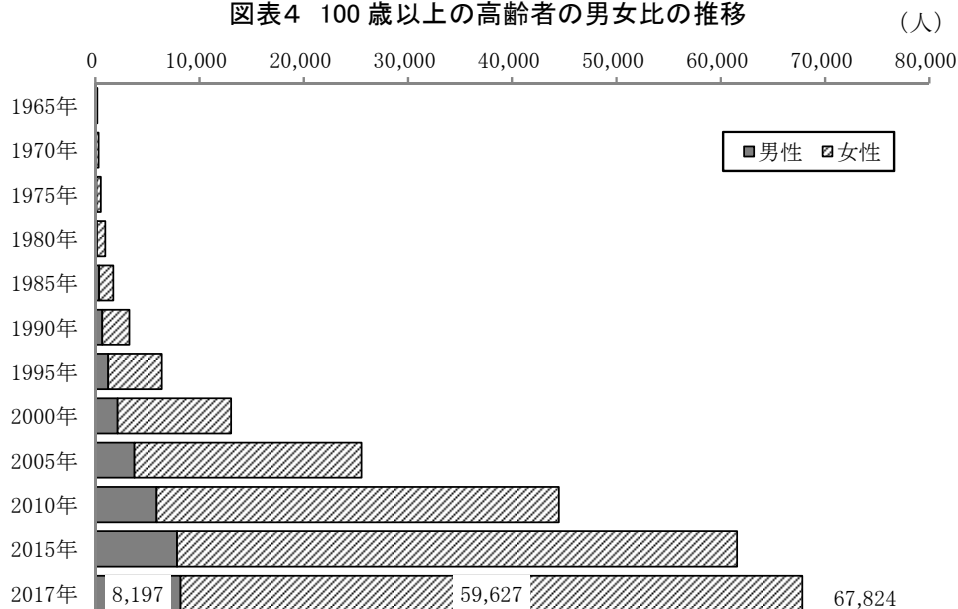
注：数値は左から順に2020年から5年ごとのもの

資料：国立社会保障・人口問題研究所 高年齢区分(70歳, 80歳, 90歳, 100歳以上)別総人口及び年齢構造係数  
出生中位(死亡中位)推計より作成

### <センテナリアンの大半は女性>

このように、100歳以上の高齢者人口は増加の一途を辿っているが、実は今日の6万7,824人のセンテナリアンのうち、5万9,627人は女性である(図表4)。その比率は約88%に及んでおり、100歳以上の人の9割近くを女性が占めている。

図表4 100歳以上の高齢者の男女比の推移



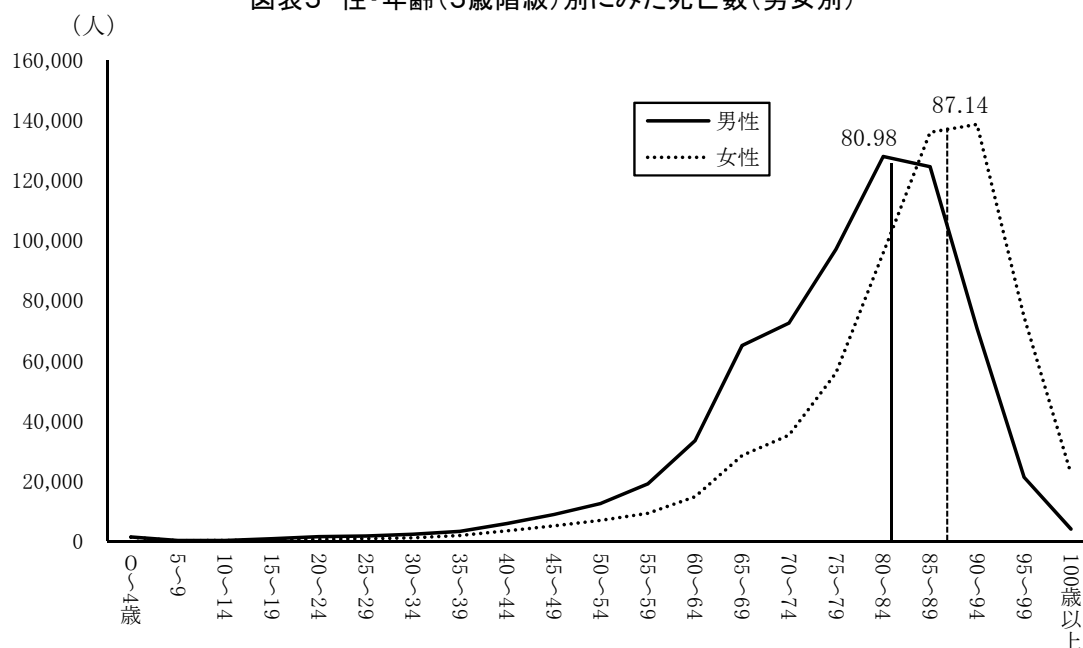
資料：図表1に同じ

男性に比べて女性のほうが平均寿命が長いため、年がそれほど離れていない夫婦であれば、妻が夫に先立たれて一人になるというケースが、その逆のケースに比べて圧倒的に多いことが知られている。

しかし今後はそれだけではなく、高齢期に自分の子どもに先立たれる女性が増加する可能性もはらんでいる。人生100年時代といっても、それは誰もが100歳まで生存する社会の到来を意味しておらず、今日の平均寿命は男性で80.98年、女性で87.14年である。しかし、人口動態調査から5歳刻みでの年齢別の死亡年データをみると、実際には男性では80歳から84歳、女性では90歳から94歳となっており、平均寿命よりさらに高年齢での死亡数が最も多いことがわかる（図表5）。すなわち、長寿な人は増えた一方で、60～70代で死亡する人も多いということである。ちなみにその死因のトップはガンである（図表省略）。

これらの点を総合的に考えると、長寿者が増えることにより、例えば100歳を超えた母親の70代の子どもが、ガンなどの病気によって母親より先に亡くなるようなケースが、今後増加する可能性がある。

図表5 性・年齢(5歳階級)別にみた死亡数(男女別)



注：数値はそれぞれ男性・女性の平均寿命  
資料：厚生労働省「平成28年人口動態統計月報年計（概数）の概況」より作成

### <長生きを「寿」とする視点を持つには自らの準備も必要>

親が子どもに先立たれることほど不幸なことはいないと言われる。しかし、人生100年時代には高齢期の親子においてそうしたケースが増加していく可能性がある。加えて、近年の未婚化・独居化の傾向や、きょうだいの少なさ（一人っ子の増加）に鑑みると、悲しみや喪失感を共有する親族も少なく、場合によっては子どもが亡くなった後の各種手続きや家・財産の処分を、老いた母親が行わなければならないというケースもあるかもしれない。

従来のような、「息子が家を継いでくれたから安心」「近くに住んでいる娘が老後をみてくれるから安心」といった、子どもに自分の老後を頼ることだけでなく、「子どもに最期を看取ってもらおう」という、これまでは当たり前のように願えたことが適わなくなるかもしれないのである。

長寿社会を真に「めでたい＝寿」ものとして捉えていく社会にするにあたっては、こうした社会変化を見据えた上で自らの将来を考え、積極的にライフデザインを行っていく必要がある。そこでは、「人生100年」を自分事としてとらえ、これまで以上に家族や血縁関係を核としたつながりに頼らず、多様なネットワークや仕組みを自分のライフデザインに自ら組み込んで考えることが求められる社会となっていくだろう。

第一生命経済研究所では、こうした社会変化と課題発生に向け、1995年より「ライフデザイン白書」を発行し、人々の生活における意識や実態、ライフデザイン等について調査・提言を行ってきた。今後もこうした動向を注視しつつ、生活者のライフデザインと充実した生活のあり方について調査・発信することで、人々が安心して暮らせる長寿社会の形を模索していきたい。

(研究開発室 みやき ゆきこ)